

柳兼子の公演活動と朝鮮における民芸運動

高, 仁淑

九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座 : 助手

<https://doi.org/10.15017/3668>

出版情報 : 大学院教育学研究紀要. 7, pp. 51-67, 2005-03-22. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学
部門

バージョン :

権利関係 :

柳兼子の公演活動と朝鮮における民芸運動

高 仁 淑

はじめに

柳兼子(1892~1984)は、明治・大正・昭和時代にわたって声楽公演の舞台に立ち、84歳の時にリサイタルを開くなど、92歳で他界するまで100数回の独唱会を持ち、歌い続けたアルト歌手である。西洋音楽が定着していない時代の日本においてドイツ・リート歌唱法における草分けとして、日本歌曲歌唱法を発展させ、日本の声楽の基盤を築いた。また、公演活動の傍ら音楽教育にいそしみ、多くの音楽人材を育てた。

そして、柳兼子は、民芸研究家である夫柳宗悦とともに、芸術活動をとおして植民地期の朝鮮人に知られ、今日も韓国人の記憶に残る人物である。⁽¹⁾

日韓国交樹立後、植民地時代からの民族紙である『東亜日報』は柳兼子を招いた。同紙は「民族を越えた美しい縁」という標題で戦前の二人の活躍を紹介している。その記事には、「当時の朝鮮人は、柳を良心的な日本人として認識」したと記されている。解放後、宗悦の韓国人弟子が中心となって、二人の招待を試みていたものの、実現できたときには既に柳宗悦は他界していたのである。

柳夫妻は、1920年4月、柳宗悦・兼子の連名で朝鮮に捧げる『『音楽会』趣意書』⁽²⁾を書き、朝鮮各地で芸術音楽を披露し、植民地朝鮮において親しまれた日本人であった。3・1運動後、夫柳宗悦が「朝鮮人を想ふ」を『読売新聞』に寄稿し、日本の朝鮮統治を批判して様々な反響を起こした。その後も朝鮮で演奏会や講演会を開き、柳夫妻は「良心的な日本人」として朝鮮人に受け入れられた。柳夫妻の朝鮮旅行では、柳宗悦の講演と柳兼子の独唱がセットに組まれ、朝鮮知識層を対象に各地を巡回した。この初めての朝鮮公演旅行は、1920年に創刊された『東亜日報』の創刊記念事業の一環として同新聞社の主催で行なわれ、10日間に7回の音楽会を開いて朝鮮人の歓迎を受けた。この朝鮮での初公演以来、夫妻は植民地期に7回朝鮮へ渡って公演を行ない、特に朝鮮の若者たちに信頼されていた。

はじめの公演旅行は、釜山、京城、平壤、開城、鎮南浦など朝鮮各地をまわり、地方では、学校の講堂などが使われ、公演会場は連日若者で満席となり、入場できなかった人が窓の外で聴いたと伝えられている。

先に述べたように柳兼子は朝鮮植民地時代の「文化政治期」に7回にわたって朝鮮に渡り、「柳兼子独唱会」を開いた。ここでは柳兼子の朝鮮での公演活動に焦点を当て、新聞等の内容をもとに、「文化政治期」(1920~1930年代初)における芸術活動の教育的意義を検討したい。

1 「文化政治期」朝鮮の音楽文化

1920年～1930年代は、朝鮮総督府が「武断統治」の方針を若干変更した「文化政治期」といわれ、民族紙の発刊を初め、民族的な運動が澎湃として起こっている。音楽界においては、この時期に、世界的な音楽家が次々と朝鮮において演奏会を開いている。柳兼子は、1920年の初演以来、1921、1923、1924、1925、1927、1928年（朝鮮経由ドイツ留学）と演奏会を開き続けていた。柳兼子の独唱会を先頭に、1923年には、世界的なヴァイオリンの名手クライスラーが招かれ、ハイペッツ、ジンバリストなどヴァイオリンの大家たちも相次いで朝鮮半島で演奏会を開いている。ヨーロッパの大家たちは、世界大戦やロシア革命の影響で、活躍の舞台を失ったために、流浪の演奏活動をせざるを得ない時代背景があり、そのために朝鮮や日本などに演奏に出かけていたと考えられている。そして、1920年代は、ハワイ在住朝鮮人やロシアに移住していた朝鮮人も母国を訪問し、各地で同胞による音楽会が行なわれた。

「1920年『東亜日報』が創刊され、柳兼子などの日本人独奏会も取り持ち、ウラジオストク居住同胞たちの故国訪問演奏会などを開催した。日本人たちを中心にした京城楽友会（朝鮮人金永煥を含む）は1920年代に至って、海外で活躍していた優秀な演奏家たちを招聘して演奏会を開いた」⁽³⁾と当時の朝鮮の音楽文化状況が記述されているように、1920年代は音楽文化が花開いた。柳兼子に続いて、日本人としては関屋敏子、藤原義江などが文化政治期に朝鮮を訪れた声楽家である。

このような朝鮮の音楽文化を背景に、柳の独唱会は朝鮮の芸術界に刺激と活力を与えた。柳兼子の独唱会を筆頭に、声楽分野では、東京音楽学校を卒業した尹心憲、韓琦柱など朝鮮人による独唱会が開かれた。しかしながら、尹心憲、韓琦柱らは、声楽家というよりも師範学校出身の音楽教育者である。純粋な声楽家としては1930年代に、林培世、安基永（永田絃次郎）⁽⁴⁾、玄濟明、鄭勲謨、蔡善葉などによって朝鮮に独唱会文化が根を下ろすことになる。そして、1930年代からは、音楽家の海外への留学ラッシュを迎える。

2 柳宗悦と朝鮮の関わり

1920年5月1日から23日までの柳一家の朝鮮公演旅行には、母・勝子、妻・兼子、バーナード・リーチが同行した。宗悦は、この独奏会の前にすでに朝鮮を旅したことがある。京城には、柳宗悦の妹などの親戚や朝鮮芸術への関心を高めてくれた浅川兄弟がいた。⁽⁵⁾

宗悦が15歳の時（1904年）、姉直枝子の夫加藤本三郎は、朝鮮・仁川の領事として活躍、その時から宗悦には朝鮮についての関心が芽生えていた。

「日露戦争が勃発すると、居留民団は再び軍に協力した。仁川領事夫人加藤直枝子らは仁川看護婦人会を組織し、負傷兵収容の準備に奔走した。」⁽⁶⁾

また、妹千秋子は、1911年頃、朝鮮総督府事務官（後、内務局長）今村武志に嫁いで京城に在住していた。⁽⁷⁾

1916年、宗悦が27歳の時、はじめて朝鮮と中国を旅するが、その時、釜山で浅川伯教が出迎え、京城で浅川巧を知り、それ以来親交を結ぶことになる。⁽⁸⁾ この浅川兄弟との出会いが宗悦の民芸運動のきっかけとなるが、これより先の1914年、京城在住の浅川伯教が柳家に李朝染付秋草面取壺を持参、柳は、その時から朝鮮芸術への興味を示すようになる。宗悦をめぐるこのような朝鮮との関わりが、後に朝鮮民族美術館を設立、光化門保存運動、民芸運動に関わる直接的な契機となった。

一方、兼子も京城に友人がいた。東京音楽学校時代の友人でヴァイオリンを専攻した上野久子である。久子は夫の仕事で京城に滞在していた。久子は、1924年に設立された京城帝国大学教授上野直昭の妻で、柳兼子の公演に久子がヴァイオリンで出演したことがある。上野久子は京城帝国大学のオーケストラの指導に協力したこともある。⁽⁹⁾ 京城帝国大学の上野直昭教授と安倍能成教授は、後から柳宗悦らの民芸運動に加わることになる。

また、柳宗悦は、朝鮮にいる浅川伯教から早稲田の南宮壁と慶応義塾の廉想燮を紹介され、彼らが頻繁に柳邸に出入りしていた。浅川伯教から紹介された詩人南宮壁は、後に柳宗悦のマネージャー役を務めるが、若くして亡くなった。

『東亜日報』主催の「柳兼子独唱会」に至る背景には、このような朝鮮人留学生たちとの接点があり、南宮壁や『東亜日報』記者・廉想燮から東亜日報社への紹介があり、その支援で実現できたのである。

京城に着いた柳兼子は、当時鍾路区花洞にあった東亜日報社を訪問、設立者金性洙と創刊同人たちに会ったと伝えられている。⁽¹⁰⁾

柳兼子の公演日程が決まり、「柳兼子独唱会」の広報活動が活発に行なわれた。その年の4月「音楽会」趣旨書を柳夫妻の連名で出した後、朝鮮では4月12日から18日まで「朝鮮を想ふ」の朝鮮語訳が『東亜日報』に連載された。そして、4月19、20日には「朝鮮の友に贈る書」の朝鮮語訳が同新聞に掲載され、直接、間接的に朝鮮人にアピールする効果を得ることになる。

しかしながら、総督府後援の日本語新聞であった『京城日報』には、柳の朝鮮行きを「芸術上からの内鮮の融和 柳氏夫妻の派鮮 京城その他で音楽会を開催」（1920年2月3日付）と報道され、柳夫妻は、総督府側の認識に困惑したこともあった。

3 朝鮮人留学生と柳夫妻

1) 柳宗悦の朝鮮民芸運動の萌芽

1919年の3・1運動当時、柳宗悦は東洋大学の哲学科教員として所属していた。3・1運動後、『読売新聞』に「朝鮮人を想ふ」を寄稿したのは、日頃朝鮮人留学生との関わりを持っていたからであろう。実際、東洋大学には聴講生制度が設けられ、多くの朝鮮人が在学していた。「オリニ」運動の先駆者方定煥をはじめ、多数の朝鮮人留学生が活躍していた。大学側は留学生のために「朝鮮人留学生の歓迎会」⁽¹¹⁾を開いて迎えている。

このような大学の環境の中で朝鮮人留学生たちと接する機会が多く、また同じ頃、朝鮮在住の浅

川伯教から南宮壁らの留学生を紹介されたこともあり、「朝鮮人を想ふ」という形で朝鮮の友に対する気持ちを表したと思われる。

韓国が解放され、日韓国交が樹立された後、韓国では柳夫妻の植民地時代の活動が称えられ、その美談が話題となった。柳宗悦夫妻は、朝鮮の人々が置かれた状況の良き理解者であり、そして芸術活動をとおして朝鮮各地をまわり、植民地朝鮮人たちに親しまれた特別な存在であった。

柳兼子の夫である柳宗悦（1889～1961）は、学習院の仲間を中心に、雑誌《白樺》創刊し、志賀直哉、武者小路実篤、バーナード・リーチらとともに白樺派と呼ばれた。柳宗悦は、学習院初等科、中等科を経て学習院高等科を優等で卒業した後、東京帝国大学文学部哲学科へ進み、後に朝鮮民芸運動を起こすことになる。浅川伯教から贈られた李朝白磁に心惹かれて、1916年から40年にかけて朝鮮を旅行し、朝鮮の文化や民芸品を愛好し、それを題材に文章を綴って日本へ紹介した。柳は、朝鮮白磁や木工品、日常生活雑器の美を問い続け、朝鮮民芸の研究に取り組んだ。柳宗悦の深い洞察力と神秘性に結びついた生活美学が、やがて朝鮮民芸運動へと発展することになる。

3・1運動後、『読売新聞』に「朝鮮人を想ふ」を投稿したが、柳宗悦は、日本の植民地政策を批判することをとおして、多くの朝鮮人エリートから好意をもって迎えられた。朝鮮民芸運動には、朝鮮在住の浅川伯教・巧兄弟の協力をはじめ、京城帝国大学の上野直昭教授ら加わる。1929年には、収集した朝鮮の民芸品や生活雑器をもとに、景福宮内に民族美術館を開いた。朝鮮民族美術館建立のために、柳兼子は朝鮮などで公演活動を行い、その収益金を寄付するなど夫妻とも民芸運動に深く関わって行くのである。

柳兼子女史の招待は、『東亜日報』と柳の弟子崔承萬（後の仁荷大学学長）らの好意であった。崔承萬は、東京大韓YMCAの総務（第3代、第8代）を歴任しているが、東洋大学の時の柳宗悦の弟子であった。崔承萬は東京大韓YMCAの第8代総務を務めていた頃（1967年）、柳兼子女史慰安会を開いている。⁽¹²⁾ それは、兼子が植民地期の京城中央YMCAで独唱会を開いて、その収益金全額を東京朝鮮YMCA会館建立基金として寄付したこと⁽¹³⁾への感謝だけでなく、良き理解者として朝鮮の友である柳兼子への慰安であろう。

2) 柳兼子の師弟関係

柳たちの1920年5月1日から23日までの朝鮮旅行に際しては、『廢墟』同人による歓迎会が金剛園で開かれ、4日の『東亜日報』主催柳兼子独唱会も成功裡に終わった『東亜日報』の回想変化欄には、「はじめて聞く外国人の西洋音楽演奏に惹きつけられた。曲目は、ミニヨン等15曲、聴衆はほとんどが若者で、アンコール要請があった⁽¹⁴⁾と伝えられている。

唱歌以外の西洋芸術音楽が人々の生活の中に浸透するまでは、一部の限られた社会層のみが演奏会へ出かけ、文化的な生活を享受していたと考えられる。このような土壌は日本・朝鮮とも同様な状況であった。

兼子は、「上野の東京音楽学校を出てまもないころで、レパートリがまだ少なかったから、プログラムをつくるのに骨折ったことをよく覚えています⁽¹⁵⁾と語っているが、その公演プログラムは、

『東亜日報』に載せられている。

一方、旧姓、中島かねであった柳兼子の東京音楽学校在学時の声楽指導教官が、ノルウェー人ハンガ・ペツォールドである。ペツォールドは、ジャーナリストである夫のドイツ人ブルーノ・ペツォールドと1910年に来日し（夫ペツォールドは一高でドイツ語を教えた）、日本の音楽教育に貢献した人物である。1912（明治45）年3月に、東京音楽学校本科を卒業し、4月には同研究科に進んだ柳兼子は、ペツォールドの下で優秀な声楽家として成長していくのである。⁽¹⁶⁾ このような外国人教師による日本の音楽教育への功労を『東京芸術大学百年史』は次のように記述している。

「すぐれた技術をもつ外国人教師たちとともに、まさに躍進の時代といえる活発な音楽学校を築いた。瀧廉太郎、山田耕筰、信時潔、柳かねらがこの時代に巣立っていた。」⁽¹⁷⁾

明治期に活躍した日本の代表的な音楽家の名前が列挙され、声楽分野では柳兼子の名前があげられている。

柳兼子は亡くなるまで恩師ハンガ・ペツォールドの写真を自宅の稽古場に掛けていたと、ペツォールドに対する兼子の格別な思いを門下生が伝えている。ヨーロッパでのペツォールドは、代々芸術家の家柄を受け継ぎ、パリのオペラ座で活躍したときは、指揮者兼作曲家のマネスに認められたという。兼子はそのペツォールドのもとで発声方法のやり直しからはじめ、本場西洋の唱法を伝授された。柳兼子が東京音楽学校を卒業する時は、「音楽の天才の令嬢、音楽学校の優等生」と評価され、『東京日々新聞』に掲載された。⁽¹⁸⁾ 雑誌『音楽界』にも、旧姓中島かねの名で東京音楽学友会の演奏会の様子が紹介されている。⁽¹⁹⁾ このようなペツォールドの音楽教育を受けた柳は、後に自分の門下生に対しても恩師と同様な姿勢で後進養成に取り組んだ。

植民地朝鮮で初めて行われた柳兼子の独唱会は、朝鮮音楽界に新鮮な刺激と活力を与え、そして若者たちの芸術への憧憬の対象となる。唱歌や童謡が西洋音楽として認識されていた当時、柳兼子の声楽公演に惹きつけられた聴衆の中には音楽家を目指して日本留学に至る若者も多数いたが、後に舞踊家となった崔承喜（1912～1975）もその一人であった。石井漠の門下生となり、1930年代に日本、朝鮮、欧米で大活躍した崔承喜は、最初は柳兼子の公演の影響を受け、音楽家として日本留学を考えていた。この公演を契機に、声楽家を目指して朝鮮から優秀な留学生たちが柳兼子に弟子入りした。1940年代半ばの朝鮮からの留学生、卜眞珠（ポクチンジュ、日本名：福山）も教え子の一人であった。夫・全鳳楚（元ソウル大学音楽学部長）らと共に柳兼子の指導を受けた。

その他、直接・間接的に柳兼子の音楽教育を受けて、西洋音楽の発声方法や歌唱力を身に付け、世界の舞台で活躍した朝鮮人留学生については後述したい。

3 1920年の初めての「柳兼子独唱会」

1920年の初めての公演旅行は、『東亜日報』によって大々的に宣伝され、京城の南大門駅に着いた柳一行をカメラが捉えている。柳兼子の独唱会に連日多くの人々が集まった背景には、南宮壁と廉想燮の努力の他に、『廢墟』同人たちの役割が大きかった。⁽²⁰⁾ 廉想燮が関与していた雑誌『廢墟』

の同人たちは、柳宗悦と芸術論を語り、交流の場を設けている。

1920年5月の「柳兼子独唱会」については、『東亜日報』に以下のような記事が見られる。

1. 「本社主催音楽会に出演する柳兼子夫人とその夫柳宗悦」と題する写真のみ掲載 1920. 5. 1
2. 柳兼子の写真のみ掲載「柳兼子夫人独唱音楽会」主催 東亜日報（写真付き）、「柳夫人独唱会の曲目解説 第一部、第二部 1920. 5. 3⁽²¹⁾
3. 3日の朝南大門到着の写真「柳兼子夫人独唱音楽会」同上写真と「柳兼子夫人とその良人」写真付き「清楚な柳兼子夫人」、基督教青年会館で 1920. 5. 4
4. 『『廃虚』同人の柳氏歓迎会』 1920. 5. 5
5. 「声如玉客如酔」写真付き 1920. 5. 6
6. 「柳兼子女史独唱会」 1920. 5. 14
7. 「柳夫人帰京」 1920. 5. 18

なお、「柳兼子独唱会」のプログラムは、本論文末尾に掲載する。

ピアノ伴奏者は島秀代となっていたが、事故のために榊原直が代わりに伴奏している。そのため、次のポスターからはピアノ伴奏者は榊原直に書き換えられている。初めての朝鮮での公演を成功裡に終えた後、「柳兼子独唱会」は1920年代の間、毎年のように続き、1921年の5月の演奏会は、「朝鮮民族美術館設立後援」を前面に出し、前田嶺子が賛助出演している。⁽²²⁾ 特に1925年以降は、同志社の学生たちを同道して朝鮮各地で公演を行った。

4 柳夫妻の同志社時代

1925年柳宗悦が同志社へ移ることになり、それにともない兼子も大阪の大手前高等女学校の音楽教師となって京都へ移った。兼子は5月からは同志社女子専門学校講師になり、他にも京都府立第一高等女学校講師を兼任した。

『同志社百年史』には、「声楽の柳兼子（宗悦夫人）が就任したのは1925年（大正14年）であった」⁽²³⁾と柳夫妻の足跡が記されている。

ミッション・スクールである同志社には、西洋人宣教師や音楽を専攻した西洋人が一緒に働いていて、西洋音楽が根付いた風土があった。めぐまれた音楽環境に柳兼子が加わることになり、音楽活動が活性化されて行くのである。

同志社女学校では、寮生を中心に構成されたミリアム・クワイア（聖歌隊）⁽²⁴⁾が活躍、チャペルの時は、同志社大学のグリークラブと混声合唱をなしていた。クリスマスなど教会の暦によって京都駅での音楽会を披露するなど、同志社混声合唱団は京都の西洋音楽文化を産み出してきた。同志社の合唱団の各地巡回音楽会は、柳兼子との関わりの深いものである。合唱団は柳兼子の指導のもとで活躍した。その活躍を窺わせるものとして「同志社女学校の大音楽会—柳兼子夫人シャネップ

嬢出演」というタイトルの次のような記事がある。「日本の誇りともいふべきアルト歌手柳兼子夫人とアメリカで音楽を専攻したミス・シャネップが専任教授として指導の任に当たっているが、二十九日の演奏会にはその中の代表的な歌手一は柳兼子指導のコアイアとして他はミリアム・コアイアとして出演する。その他ヴォカル・ソロでは柳兼子夫人と候玉芝嬢が、楽器では奥山俊子嬢のピアノ・ソロがあるから音楽会としては華々しいバラエイテイのあるものとして各方面から非常に期待を持って迎えられている」⁽²⁵⁾

この巡回音楽会は、同志社構内の火事に見舞われた静和館修復のための学生たちによる基金募集公演だった。

また、柳兼子は京都へ移ってから京都混声合唱団を組織、京都の音楽界に新しい文化を築き、担い手となっていくことになる。「1926年柳兼子や上村けい、竹内禎子、近藤義次らを中心に京都混声合唱団が組織された」⁽²⁶⁾とあるように東京音楽学校出身者を中心に京都混声合唱団が結成され、柳兼子が率先してコーラス文化をリードした。

同志社の西洋音楽活動を背景にした柳兼子の意気込みが公演活動につながり、同志社に赴任したその年の秋には、柳夫妻は同志社女子合唱団を引率して朝鮮公演に旅立ち、「柳兼子独唱会」の宣伝が再び紙面を飾る。⁽²⁷⁾

1925年柳夫妻は、同志社女子英文科学生たちとピアノ伴奏者オート嬢を引率して朝鮮公演旅行に出かけた。その時は同行した同志社女学生たちによる演奏を組んで朝鮮各地を飛び回った。その「柳兼子夫人独唱会」の広告や「柳兼子高音独唱会」⁽²⁸⁾という見出しが連日報道された。10月16日、長谷川公会堂で行われた音楽会の様子が『東亜日報』に見られる。

プログラム構成は、一部と二部に分けて行なわれた。同志社英文科女子学生全員の合唱、柳兼子の独唱、学生の独唱、学生のピアノ独奏の順で公演され、好評を得た。10月17日の「本社主催音楽大会に登壇した日本同志社大学合唱隊一行」の記事のみ紹介すると、

メゾソプラノの名手としてはやくから朝鮮で知名度が高い柳兼子とその夫柳宗悦が引率してきた日本同志社大学専門部英文科女子学生一同は、予定どおりに昨日午前7時40分の列車で入京した。柳兼子夫人は流れる歳月に顔にしわが増えたようだが、変わらぬ明るい姿で、迎えに来たお客にいちいち挨拶を交わし、夫妻が引率した女学生たちも野原に放たれた雀たちのように胸を張ってそれぞれさえずった。一行は、すぐ二見旅館⁽²⁹⁾へ向かって荷物を下ろした後、景福宮など朝鮮古跡を見物し、午後3時半からは公会堂に行ってその日7時半から本社主催で開かれる音楽会の準備をしていた。学生たちは全部二十歳前後の可愛い娘盛りの団員だった。

(写真は柳宗悦夫妻以下学生合唱隊)

再び、同志社学生たちを引率して朝鮮公演旅行に出かけた1927年は、韓服チマ・チョゴリを身につけて舞台に立ち、朝鮮人聴衆を感動させ、友好関係をアピールした。

「日本の女流声楽家として名高い柳兼子夫人の独奏会は、予定どおりの10月8日中央YMCAで開かれた。朝鮮に親しい柳兼子女史の公演であるので、朝鮮人からの人気は普通の日本音楽家とは、比較にもならないほど高かった。青年会館に集まって来る観客は、定刻にすでに満員

になり、拍手で開演を催促するほどだった。このような光景の中で、人気の焦点である柳兼子女史が、朝鮮人のチマ・チョゴリを着て壇上に登ることによってさらに拍手がわいた。

歌曲セミリアーデから始まり、以降順序どおり、彼女のソプラノ・アルトの技量がクライマックスを演出、満員の人たちを微妙な音律に陶醉させてしまった。特に六十四名の同志社大学女学生の合唱は、近年に見られない大合唱で、異彩を現し、喝采がとまらなかった。⁽³⁰⁾

同志社女子合唱団員の数も前回に比べて倍以上の人数が来朝、日頃培われた同志社の西洋音楽活動の体験をもとに、歌声を贈ったことになる。⁽³¹⁾

一方、この時合唱団の一員として参加した英文科の学生が同志社『期報第五十三号』に紀行文を寄せている。その内容を一部分紹介する。

柳先生の御友人濱口良光氏及同志社京城会の森尻、木下氏の御案内でパコダ公園、昌慶園、秘園等を見物する。見物又見物の慌ただしさに折角の博物館も殆ど素通りの有様であった。堂々たる総督府のいばつた建物の中を足袋はだしのまま見物した赤ケットの一行はさぞ滑稽だったらうと思はれる。同志社支部の笠谷保太郎氏、川端三次郎氏、横山富吉氏、安田氏、八木氏等の面々と朝鮮古美術の研究家でいらっしゃる浅川伯教氏、濱口良光氏等の御好意で歓迎お茶会を開いてくださった。場所は柳先生の朝鮮民族博物館のある輯敬館であったのも我々の愉快的記憶の一つである。午後十一時十分多数の見送りの中に京城を出発する⁽³²⁾

この紀行文から学生たちの朝鮮植民地に対する認識を窺うことができる。このように、同志社で人材を育てながら、その公演活動の場を学生たちと共に朝鮮へ広げ、日朝友好関係を保ち、京都を拠点に公演活動をしていた兼子は、1928年朝鮮経由のシベリア鉄道に乗ってドイツ留学することになる。このとき、京城のメソジスト教会主催によって長谷川公会堂で独唱会を開き、上野久子もヴァイオリン独奏で賛助出演した。兼子はドイツ留学を契機に、アメリカへ飛び、再び東京へ戻るといふように音楽環境や生活環境が変わることになる。

5 朝鮮音楽界

1920年代は、朝鮮音楽界は世界的な演奏家たちによる演奏会によって転換期を迎えることになる。柳兼子の独唱会を契機に声楽分野を中心に公演が盛んに行なわれ、専門的な人材を育成することになるとともに、1923年からは、大家たちの訪問があいついだ。5月にはクライスラー、11月はハイペッツ、そして1924年11月にはジンバリスト等の訪問演奏会が設けられた。

音楽を営む人を指して「風楽チェンイ」⁽³³⁾と呼ぶなど、音楽人を軽んじた時代に世界的な演奏家たちの来朝公演は画期的なことであり、柳兼子の独唱会は本格的な独唱会となった。その頃朝鮮では、1920年洪蘭坡の《鳳仙花》が発表され、芸術歌曲への嚆矢となったのである。⁽³⁴⁾

また、ピアノ専攻の金永煥をはじめ、ヴァイオリン洪蘭坡、ソプラノ尹心惠、韓琦柱らが中心になって1920年12月、東京音楽学校同窓会主催で「ベートーベン生誕150周年記念音楽会」を開くなど、音楽教育を受けた専門的な音楽家による演奏会も開かれていた。

声楽分野では柳兼子独唱会が刺激を与えることになり、1920年代後半から音楽徒の海外への留学ラッシュが始まり、純粋な声楽家の輩出は1930年代に実現する。

また、音楽を演奏する公演場も、最初はYMCA講堂が主だったのが、京城公会堂（別名 長谷川公会堂）も建てられ、1930年代は府民館など公演場が増え、それに伴って朝鮮人による演奏会も活発に行なわれた。これに先立つ1920年代の声楽公演は、アカデミックな独唱会よりも独唱、合唱の性格を持った声楽が主で、ソプラノ歌手として尹心恵と韓琦柱が活躍していた。

このように初期の朝鮮声楽界を担った尹心恵らは、唱歌時代にオペラ・アリアを歌ったことになる。1920年代を境目に唱歌は、各々の音楽ジャンルを形成していく。尹克栄の《半月》が子供の童謡音楽へ展開し、洪蘭坡の《鳳仙花》は芸術歌曲へ発展をもたらす等の過程であり、大衆歌謡もこの時期にジャンルが分かれていくことになる。⁽³⁵⁾

草創期の女性歌手尹心恵は、遺作《死の賛美》⁽³⁶⁾を最後に世を去った。『東亜日報』のトップ記事として報じられた尹心恵の死は、レコード産業の大陸進出の大成功をもたらすことになる。

尹心恵は、1918年京城女子高等普通学校師範科を出て、一時期音楽教師を務め、1919年から官立東京音楽学校師範科で音楽を専攻した。尹心恵、韓琦柱、金文輔らは、3・1運動の日朝融和政策の一環として朝鮮総督府の官費留学生の身分で東京音楽学校師範科へ派遣された。後に、クラシック音楽家から大衆歌手へ転向する尹心恵は、1920年のベートーベン生誕150周年記念音楽会に、東京音楽学校同窓の名で参加し、留学中の1922年には、東京YMCAで独奏会を開いたこともあった。1923年音楽学校を卒業して朝鮮に帰った尹心恵は、ソウルで金永煥や洪蘭坡らと活発な公演活動をする。1920年代の楽壇の女王となる。

1918年には金永煥が東京音楽学校を卒業、洪蘭坡が1918年度に入学し、3・1運動後、官費留学生尹心恵、韓琦柱、金文輔らが入学・卒業したが、その後官立東京音楽学校では、朝鮮人を入学させなかった空白期がある。東京音楽学校が朝鮮人の入学を断ったため、洪蘭坡をはじめ、東京高等音楽学院（現国立音楽大学）、帝国音楽学校、東洋音楽学校（現 東京音楽大学）、武蔵野音楽学校などへ留学した音楽徒が多かった。これらの新設音楽学校を拠点に朝鮮人留学生たちは、積極的な音楽活動を繰り広げていくのである。

東京高等音楽学院は、学校の紛糾が起き、東京高等音楽学院と帝国音楽学校に分裂したが、柳兼子は、東京高等音楽学院と帝国音楽学校で声楽を教えることになり、終戦まで朝鮮人留学生にも音楽レッスンを行なった。その時の東京高等音楽学院の出身音楽家が洪蘭坡、洪成裕、金元福等であり、帝国音楽学校卒業生が全鳳楚、羅運榮、孫牧仁らである。

彼らは、柳兼子の公演会や個人レッスンなどをとおして直接・間接的に影響を受けた後進ということができる。

むすびにかえて

柳兼子が活躍した1920年代から1930年代初めは、朝鮮総督府当局の植民地政策が転換され、いわ

ゆる「文化政治」が標榜された時期である。各種言論機関の増設は、文化面の紙面を増やし、音楽や文学、美術などの諸芸術活動を促進させることにつながった。東亜日報、朝鮮日報などの日刊民族新聞が創刊され、東亜日報の創刊記念事業の一環として行なわれた「柳兼子独唱会」は、朝鮮人の好反応を得た。新しい芸術文化活動が芽生えはじめ、情緒的な生活気風が社会全般の変化をもたらした。

柳兼子は、数多くのレパートリーを持って公演会に臨んでいたが、芸術歌曲やオペラ・アリアにいたる声楽ジャンルを披露、当時の学校教育の中で行なわれていた唱歌の領域を越える画期的な芸術活動として朝鮮人聴衆に反響を起こした。また、小学生を対象としては「柳兼子夫人童謡唱歌会」を企画した。声楽家が童謡を歌ったのは、朝鮮の日本人学校でははじめてのことで、1920年代の朝鮮童謡運動との関わりが推察される。音楽教育（実技教育）は個人レッスン方法で行なわれるという徒弟関係の特殊性を持っている。その個人的接触を通じて、柳兼子は、芸術活動の傍ら朝鮮人留学生たちに時代の表現者としての情緒を培ったと考えられる。

また、同志社女学校の合唱団を引率し、朝鮮の舞台で公演することをとおして、朝鮮人たちとの交流や芸術体験をさせたこと等は、柳兼子の音楽に対する情熱と教育実践の成果であろう。

一方、先に朝鮮総督府の日本語新聞であった『京城日報』に、柳の朝鮮行きが「芸術上からの朝鮮の融和」と報道されたように、「文化政治」という植民地政策自体は、その美名のもとに、朝鮮人エリートたちの政治的関心を逸らすための迂回政策の一環であったことも排除できない。したがって、柳宗悦の民芸運動に、兼子の公演で得られた収益金を注ぎ、美術館を建立するなどした彼らの活動は、柳夫妻の本意とは別に、芸術を通した「内鮮融和」政策として朝鮮総督府によって認容されていたことも否定できない側面である。

参考文献

- 『柳宗悦全集著者篇』築摩書房、1981
柳宗悦『民芸四十年』岩波書店、1984
渡鏡子『近代日本女性史』⑤ 音楽 鹿島研究所出版会 1971
松橋桂子『柳兼子伝』水曜社、1999
『東亜日報』東亜日報社、(1920～1930)復刻版

※柳独奏会プログラム（1920年5月4日）『東亜日報』より

ピアノ伴奏 榊原直

第一部

- 一 トーマ作 歌劇『ミニヨン』
 - a 《君よ知るや南の国》
 - b 《遠くより哀れなる児はきぬ》

二 シューベルト作

- a 《夕映に》
- b 《死と少女》
- c 《春の信仰》

三 ピアノ独奏

四 マイヤベーアー作 歌劇『予言者』

- a 《あゝ、わが子よ》
- b 《恩恵を施したまえ》

(十分間休憩)

第二部

一 ヴェーバー作

歌劇『魔弾の射手』《たとえ雲に隠されても》

二 ヴェルディ作

歌劇『トロバトーレ』

《炎が光る》

三 シューマン作

- a 《月夜》

チャイコフスキー作

- b 《なぜに薔薇はそんなに青白いのか》

シュトラウス作

- c 《虚無》

四 ピアノ独奏

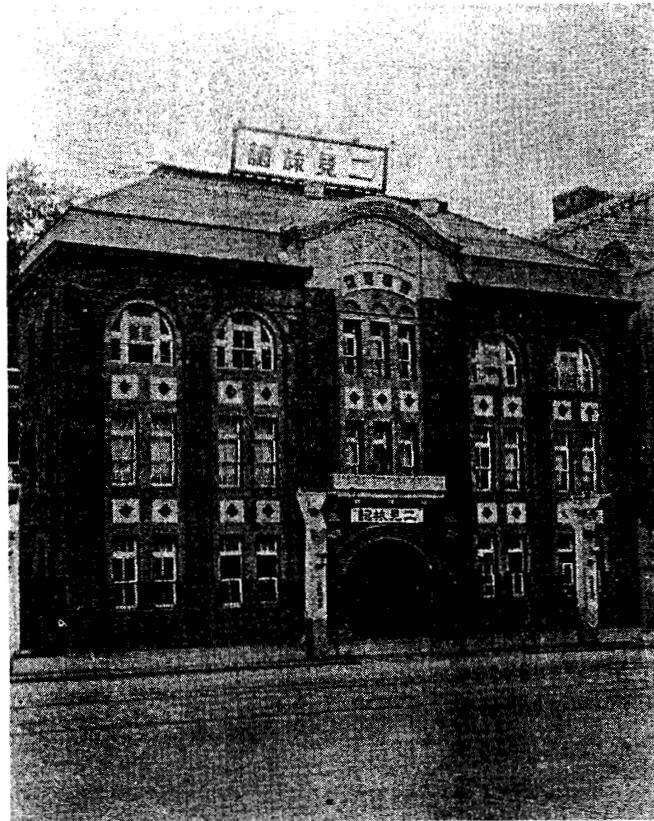
五 ビゼー作

歌劇『カルメン』

- a 《ハバネラ》

- b 《セグディル》

- (12) 柳東植「柳兼子写真」『在日本韓国基督教青年史』在日本韓国YMCA, 1990, 318頁
- (13) 柳東植『在日本韓国基督教青年史』在日本韓国YMCA, 1990, 204頁
- (14) 『東亜日報』1983. 4. 9
- (15) 「夫・柳宗悦を語る」『三千里』冬（第40号）, 1984
- (16) ベツオールドと卒業生中島かね写真が寄せられている。『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇, 1987, 30頁
- (17) 『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇, 1987, 522頁
- (18) 「東京音楽学校…中島かね」「音楽の天才の令嬢」『明治期日本人と音楽』明治45年3月26日
- (19) 『音楽界』（明治54年8月号）1912年
- (20) 「夫・柳宗悦を語る」『三千里』冬（第40号）, 1984
- (21) ポスターは、後掲①
- (22) 『東亜日報』1921年5月24～25日、後掲②
- (23) 『同志社百年史 通史編一』同志社 1979, 807頁
- (24) 1916年前後にミリアム・クワイアと名付けられた女学校寮生によって組織されたコーラス（聖歌隊）で、校内の静和館が火事に見舞われた時、それを改築する基金集めのため、同志社女学校音楽会を京都、名古屋、岡崎で行なった。
- (25) 『女学校期報』第52号, 1927, 294頁
- (26) 木村和男『京都楽団史点景』人文書院, 1996, 11頁、及び中原郁男『京都音楽史』音楽之友社1970, 31頁
- (27) 1. 「柳婦人独唱会」, 写真「万国少年少女音楽会光景」1925. 10. 15
2. 「柳兼子引導下廿名女子合唱隊」「演奏曲目」1925. 10. 16
3. 写真付き「日本同志社大学合唱隊一行」1925. 10. 17, 後掲③
4. 写真付き「微妙な旋律に満場が恍惚」1925. 10. 18
- (28) 『東亜日報』1925年10月15日
- (29) 二見旅館は、日本人の利用客のために建てられた当時の日本旅館である。（写真後掲）
- (30) 「再請三請の妙音曲 錦上添花の合唱並奏」『東亜日報』1927年10月10日、写真後掲④
- (31) 「柳兼子らが引率した同志社女学校の合唱団写真」『期報第五十二号』1927, 後掲⑤
- (32) 「英文科三年鮮満旅行記」『期報第五十三号』1928, 109頁
- (33) 金永煥『韓国日報』1974年4月26日
- (34) 拙稿「朝鮮における芸術歌曲の展開と洪蘭坡」『日朝関係史論集』, 新幹社, 2003年5月20日
- (35) 拙稿「植民地期朝鮮の大衆音楽文化——1920年代の大衆歌謡を中心に——」『比較文化研究』（アジア文化研究特集Ⅲ号）日本比較文化学会, 2001
- (36) 『東亜日報』1926年8月5日



※二見旅館（出典：『京城と仁川』龍史堂出版，1978）



本社主催音樂大會에 登壇한
日本同志社大學合唱隊一行

본 회 주최한 제 1회 음악대회는 조선에 음악이 발달된 이래 가장
대규모로 행해진 것으로서 (특히) 이 회가 처음으로 개최된 이래
사실상 음악의 발달을 촉진하는 데 크게 공헌한 것으로 생각된다.
본 회는 이 회를 계기로 음악의 발달을 촉진하는 데 노력할 것
이다. (이 회는 본 회가 주최한 것으로서) (이 회는 본 회가 주최한 것으로서)
본 회는 이 회를 계기로 음악의 발달을 촉진하는 데 노력할 것
이다. (이 회는 본 회가 주최한 것으로서) (이 회는 본 회가 주최한 것으로서)

③ 「同志社大學合唱隊一行」『東亞日報』1925年10月17日



再請三請妙音曲
錦上添花의 合唱並奏

本會 柳兼子 獨唱의 盛況

본 회는 이 회를 계기로 음악의 발달을 촉진하는 데 노력할 것
이다. (이 회는 본 회가 주최한 것으로서) (이 회는 본 회가 주최한 것으로서)

④ 柳兼子獨唱會 (京城會會堂) 『東亞日報』
1927年10月10日



⑤ 미스·시야나쯍, 柳兼子兩先生引率同志社
女學校合唱團 『期報第五十二號』1927年

YANAGI Kaneko's performance activity and MINGEI (National Art) Movement in colonial Korea

Insuk KO

YANAGI Kaneko (1892-1984) developed the Japanese song singing method when Western music is not established in Japan, and was a pioneer in Japan of the Deutsches Lied singing method, and built the vocal music base of Japan.

And YANAGI Kaneko is a person who was known by the Koreans of the colonial term through art activities with her husband, YANAGI Mumeyoshi, who was a folk craft investigator and who remains in memory of Koreans till today.

Mr. and Ms. YANAGI were special Japanese by the “concert” prospectus” offered to Korea with the joint signature of Mumeyoshi and Kaneko in April 1920, and art music was announced in Korean various places and who was loved in colonial Korea. After the 3. 1 movement, YANAGI Mumeyoshi contributed to “Yomiuri Shimbun” “thinking about the Koreans”, criticized Korean government of Japan, and caused various echoes.

Mr. and Ms. YANAGI have held the concert over 7 times during the colonial term of Korea, and high evaluation was made by the Korean young elite.

From the 1920s to the first 1930s was the time when the Korean governor-general's colonial policy was converted, and the so-called “cultural politics” was advocated, when YANAGI Kaneko played an active part. Extension of various organs of public opinion increased the space of a cultural site, and was connected with promoting many art activities of music, literature, fine arts, etc.

On the other hand, a colonial policy of those days has one side which cannot eliminate that it was a part of a detour-policy for diverting the Korean elite's political concern to the basis of the beautiful name of the “cultural politics.” Therefore, it is asked whether it was based on their contribution to the Korean.

Apart from Mr. and Ms. YANAGI's real intention, the performance activities and folk craft movement in colonial Korea weakened the Koreans' political concern as the aim of a Korean governor-general's, and can be said that it spread as a reconciliation policy through art.